ボーダーから

奄美を考える ⑪

岩下明裕

奄美曼荼羅

昨年2月10日夜半、大島を目指し鹿児島港からフェリーとしまに乗船。とし ま？ 限られた時間のなかトカラ列島を一目でも見たかった。小ぶりな新造船は快適だ。早々にベッドに潜りこむも起床は5時（口之島着）。

中之島から宝島まで、1時間おきに寝ぼけまなこでデッキに降りて島影を撮る。15時半、名瀬に着くがヘロヘロ。大島の人たちの多くが、この船に乗ったことないそうだが、鹿児島に行くためには使うまい。でも、としまだけ、なぜターミナルからああも離れた場所に到着するのか（重い荷物を引きずり、街中まで歩いたので体はボロボロ）。

名瀬の知人が加計呂麻には必ず行けと言った。雨中で気が重く、肌寒かったが、安脚場、島尾敏夫記念碑、諸鈍、実久ブルーどれもが印象的だった。瀬戸内から名瀬までのトンネルの長さにも驚いた。周りを山に囲まれた大和村と宇検村、奄美市に合併しなかった龍郷、鹿児島への近さを誇りにする笠利。一つの島として語れない大島のスケールと小宇宙のそれぞれの違いと重なりを学んだ。

期待したのが喜界島。大島からの往路が深夜、帰路が早朝なので2泊しなければならないが、私の若いころ伝説となった銘酒「朝日」がここにはある。工場見学をしなかったのが心残りだが、次回の宿題だろう。あ、鶏飯もおいしかった。

徳之島は以前、訪問したことがあったので、見送った（その後、3月に空路で訪問）。実は名瀬から沖永良部、与論、沖縄とフェリーでつないで南下する計画だったが、ここで計画が大きく狂う。まず、しけでフェリーが欠航。急きょ、日本エアコミューター（JAC）のイチオシ、ホッパー便を使って沖永良部に向かった。沖永良部は面白い。西郷隆盛を慕う和泊と琉球に親しい知名の違いを知った。「西郷どん」の海岸ロケ地は知名だったのね。さあ、明日はいよいよ憧れの与論。と思いきや、しけでまたまたフェリーが欠航するとか連絡が入った。いや正確には抜港だったかもしれない（この言葉を初めて聞いた）。

残された道は一つ、JACで那覇に飛ぶしかない。急きょ、沖縄のホテルを予約し、夜は泡盛とチャンプルー。一泊で戻ってくるからと翌日は重い荷物をホテルに預け、那覇から与論に飛ぶ。これは琉球コミューター（RAC）。与論は沖縄なんだね。その夜は（前にも書いたが）「島有泉」を頂きながら、オリオンビールを使った地魚のフライ（アイリッシュパブのフィッシュ・チップのようなものだが、はるかに美味！）を堪能した。

翌日は快晴。波も穏やか。予定通りにマリックスで那覇へ向かう。甲板でたたずまい、沖縄と与論をじっと見る。北緯27度線はどこかと目を凝らしたが、どこにも線はなかった。ほぼ2週間の島伝いの旅はかくて終わった。奄美の皆さん、お世話になりました。まだまだ真冬日が続く北海道。飛んでいきたけど、コロナがなあ。いま3月後半に与論に行けないかと真剣に悩んでいる。JACはPCR検査をほぼ無料で受けさせてくれるそうだし。

北海道大学から来たと称する怪しいオヤジが現れたら、それは私です。ぜひ黒糖焼酎の一杯もお付き合いくださいね。

「奄美」は曼荼羅（まんだら）。だが、この曼荼羅は主尊が必ずしも中心にはいない。地域のどこもが主尊になる独自の曼荼羅を持っている。そしてその曼荼羅は世界とつながる。私のモットー「世界はボーダーフル」。奄美は間違いなく、その中心のひとつだ。

＊「西日本新聞」に50回にわたって連載されたエッセーを編んだ『世界はボーダーフル』（北海道大学出版会）もぜひご一読ください。

（おわり）

喜界島。東経130度もボーダー！